

図版⑤ 張朗碑・碑陰



図版④ 張朗碑・碑陽



張朗墓誌銘

永康元年(300)
(西晋時代)

歴代墓誌銘にみる
書法の変遷②

木 雞

木雞室

伊藤 滋

張朗墓誌銘は、高さ五十四余り、幅二十七〇、一行十九字、十九行あります。全体の拓本にみるように碑の様式を具えています。碑額には「晋故沛国相張君之碑」とありますが、文章の内容、大きさ、埋葬されていたことから野外にたてられた碑ではなく、墓誌銘として使用されたようです。原石は一九一六年に出土し、一九一九年には日本に將來され、大倉集古館に所蔵されました。一九二三年の関東大震災で張朗碑も破損しました。その後、補修され現在も同館に保存されています。最近の中国の書物には、張朗碑は壊れて補修されたが、文字の大半が失われたと記されています。確かに十数片に割れたようであるが、補修後の拓本をみると見ることができない文字は十文字余りです。こうした経緯からこの碑の旧拓本は非常に少ないです。

書体は、八分隸書で波磔がやや強調され力強く押し出されています。碑額部分の九字はやや平板ですが、碑陽にあたる文字は小さいためか、書きぶりがやや荒い筆致であり、独特の趣を示しています。碑陰の文字は、碑陽に比してやや大きく丁寧な書きぶりです。後漢の隸書と比較するとやや平板な定形化した印象を感じるのではないのでしょうか。

次号は同時代の「張鎮墓誌銘」です。

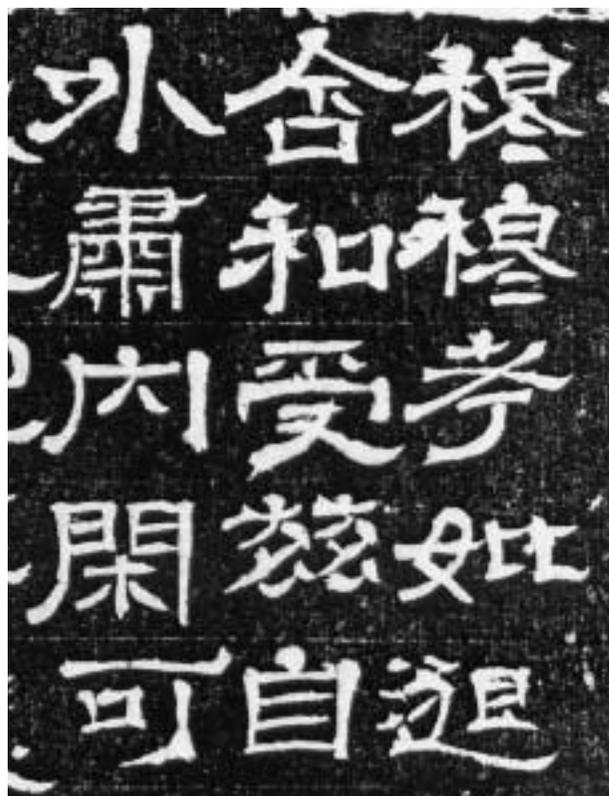
この欄に関するご批評、ご意見、ご希望、ご質問などをお聞かせください。私宛に直接メールで、また編集部宛にお送りいただければ幸いです。

伊藤 滋 メールアドレス mokkei@galaxy.ocn.ne.jp

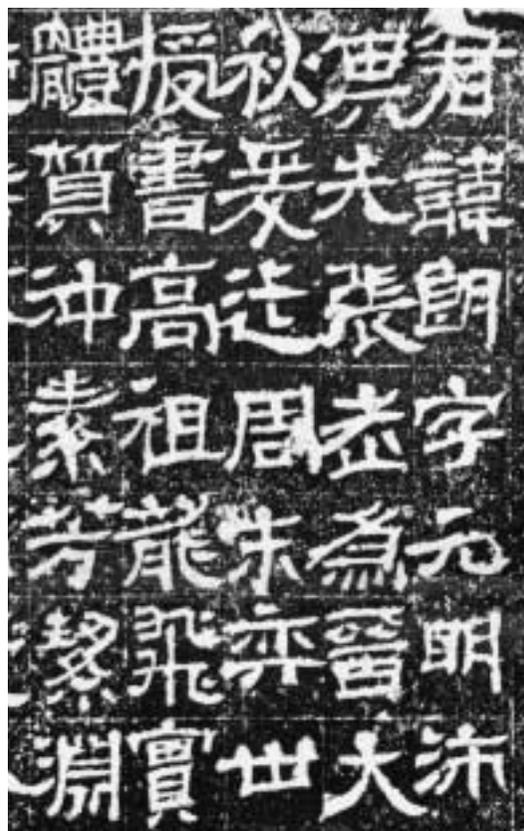
图版① 碑額部分



图版③ 碑陰部分



图版② 碑陽部分



書道芸術院

平成の群像 (2010)



小竹石雲

「自分らしい 書を求めて」

昨年、師三宅素峰先生の遺作展が、大勢の力で開催できた。出展作品を決めながら、自分と書の拘り方が軽薄なことに気がついた。師は本当に全力投球の人生であった。種谷扇舟先生、三宅素峰先生両匠共に「自分の書」を指導してくださった。なかなか前が見えてこない。今になって書人としての見識、学識の浅さを恥んでいる。

目先の感覚、恰好良さが先行してきた作品作りを後悔している。急ぐあまり、このあたりの勉強を軽視していたようだ。師が生前、書展の作品集を見ながら、最近の傾向は、「自分が」「自分が」と競争するような作品が多くなった。作品には品格が大事だと言うが全くそうだったものがないと嘆いておられた。そして、私もよく注意を受けた

が理解できていなかった。今思えば迫力、逞しき、強靭さを否定していたわけではなく、学識、見識不足を露呈した作品を憂いておられたのだと思っている。表現方法はいろいろあるがその根底には「人」がいる。基本をしかり身につけた上での学書でないといふ自分らしさは出てこないように思う。

今回の遺作展で自分を見直すよい機会になったことを感謝している。

今回の拙作は、師の遺作展を通して学んだことが少しでも実作に表現できたらと思っ筆を執った。焦らず、「母」の包容力、暖かい温もりが伝わってくるような作にしたかった。これらが自分の第一歩という思いを強くしている。年令的にも還暦を過ぎ、立場も変わってきたが、依然として安易に妥協する自分が見え隠れする。健康を害すると弱くなるので、健康第一に考えて、確固たる信念を持って書の道を生きた師に少しでも近づけたらと思っている。



書のひろば

理事長 辻元大雲

毎日書の研修訪中団報告

25回目となる毎日書の研修団は62回毎日書道展会員賞・毎日賞受賞者より18名が選抜され、顧問に西林昭一先生をお迎えし大雲団長、前衛部の丸尾鎌使副団長、毎日新聞文化事業部山之内郁治秘書長、北川添乗員合計23名の団で中国北京・鄭州・洛陽・西安・蘭州を訪問、有意義かつ充実の8日間であった。

9月17日(金)午後3時半成田を出発。北京空港近くのホテルにて宿泊。

18日(土)北京から飛行機にて鄭州へ。河南省博物館、河南省考古研究所を見学。考古研究所では特別に新出土の木簡類を直接試験管内ではあったが拝見、普通では考えられない経験を見せていただいた。鄭州泊。

19日(日)鄭州から偃市商城博物館へバスにて。顔真卿の若書きの墓誌銘など墓誌銘を中心に拝見。収蔵品の多さに驚く。顔真卿書の墓誌拓本購入。午後からバスで洛陽龍門石窟へ。憧れの古陽洞を特別拝観、時間もたっぷり満足。その後対岸の東山へ、日中の作家による碑林を拝見。龍門石窟保護基金のために建立されたもの。洛陽か

ら西安へは新しく敷設された新幹線に乗車。日本の新幹線とはほぼ同じスタイルで快適。

20日(月)西安市内の参観。華清池・秦の始皇帝兵马俑坑・大雁塔・碑林博物館などを見学、筆墨などの買い物も碑林裏の市場にて。西安泊。

21日(火)西安から空路蘭州へ。昼過ぎ蘭州着、元甘肅省考古研究所長の何双全氏、ご夫妻と文物管理局長の馬文治氏と昼食会の後、甘肅省博物館・甘肅省考古研究所参観。新装なった博物館は急ぎ足で、考古研究所では泉置簡牘などを直接手に持って拝見でき感激。時間も充分とっての特別参観は西林先生のご配慮で実現。夕食会は考古研究所の張所長はじめ職員4名をお招きして白酌の応酬で盛り上がる。

22日(水)蘭州から空路北京へ。居庸関万里の長城参観。中秋節の北京はすっかりと爽やかに満月が美しかった。夕食は北京ダックでにぎやかに。

23日(木)終日北京市内。天安門前広場から故宮博物院、保利博物館(民間)、琉璃廠でお買い物のは2時間たっぷり。夕食はさよならパーティをホテルにて。

24日(金)早朝空港へ。午後1時半過ぎ成田到着。再会を期して解散。

毎日書道会の各種の事業の中でこの研修の旅は大きな意義を持ち、将来の作家育成に多大の貢献をされていくものとして大いに期待したい。本院からは毎日賞受賞の漢字部島田白露さん、

近代詩文書部の武山櫻子さん推薦され参加した。



龍門奉先寺にて。武山(左)・島田(右)さんと

第9回国際書法交流奈良大展開幕

一九九〇年シンガポールで第一回展が開催されてよりほぼ隔年開催で、第三回展東京銀座セントラル美術館で日本が担当して以来二回目の開催となった。今回は奈良平城京遷都一三〇〇年祭に合わせタイムリーな企画となり、二〇ヶ国・地方の参加で、出品作も日本250点余、参加各国から約200点となり、計450点余と過去最高の規模となった。実行委員長は恩地春洋本院会長が重責を担ったほか委員に多数院関係者が当たった。会期14日から19日。

10月13日に陳列、各国代表者およそ150名の方々が関西空港より宿舎の奈良日航ホテルへ集結された。



開会式テーブルカット(各国代表団)

10月14日9:30より開幕式・テーブルカットが会場内国際ホールとロビーにて行われた。開幕式では北村正任毎日新聞社会長、奈良県知事、恩地実行委員長、参加各国代表などが挨拶、展覧会場の奈良県文化会館は参観者で大変な賑わいであった。その後席上揮毫会が会場玄関前で各国入り乱れて代表者が揮毫、友好交流の実を挙げた。

午後からは京都大学大学院阿辻哲次教授による講演、「天平文化と書」と題して日本語と中国語をまじえてユーモアあふれる内容で充実、その後会場前広場で九州福岡の青豊高校生による書道パフォーマンスがにぎやかに。夕刻には日航ホテルにて歓迎レセプションも盛大に開催された。

15日には代表者会議が北村理事長を議長として開催され、無事審議終了、次回開催国はマレーシアに決定した。夕刻には秋篠宮ご夫妻が会場をご覧になり錦上華を添えていただいた。

漢字 (二)

名越蒼竹

臨書の功罪

大学から戻ってしばらくして、改めて師風を学び直さなければと悟ったものの、手本によって作品を書くことにはやはり大きな抵抗があったのも事実である。そこで当時師が推奨しておられた王鐸に作品化の手がかりを求めた。いわゆる倣書である。その前段として王鐸の臨書は相当やった。これによって師にも私の出品方法を一定認めていただくことができたが、私の経験では臨書にも落とし穴が潜んでいる。それは自運よりも臨書の方が圧倒的に「格好がつく」ため、どうしても書いていて気持ちのよい臨書に時間を割いてし

まうということだ。

そこで二つの工夫をした。一つは臨書する古典の幅をできるだけ広げ、明清時代全般はもちろん、漢代以前の篆隸にも親しむことであり、今ひとつは師風も含めて現代作家の作品集を条幅に「臨書」することである。しかもできるだけそれぞれ一枚で仕上げるようにすれば、創作力にも役立つのではないかと考えた。

ある状態を深化と見るか停滞と見るかは人様々かもしれない。しかし今の私には深化は不十分でも停滞していないことのほうが重要な問題なのである。

21世紀の書

—私の主張—

前衛書 (二)

工藤永翠

地方に住む私にとって、いろいろな面で中央は憧れである。今ではインターネットにより、ある程度の情報は入手できるが、それでもまだ場所・時間的ハンディは多少なりともあるのかもしれない。私は、師千葉蒼玄先生の住む地域から遠いこともあり、先生からの指導は、主に添削と年に何回かの講習会によるものだった。前衛書に限らず、どの部門でも同じだが、「目習い」の大切さは不可欠

「秘」

である。特に前衛書は書くスピードが速く、気を抜くと先生の動き・筆使い等重要な箇所を見逃してしまう。私は限られた時間、先生の動きをどんな事でも目に焼き付けるようにしたものだ。

習う事により少しずつ力はつくが、やはりどうしても弟子の書は師匠の作風と酷似してしまう。それは仕方ない事だが、そこから脱却し個性溢れる書を書くためには、やはり自己研鑽の時間が必要になってくる。また、場所的ハンディがあることで、技術を習得することはより時間がかかるかもしれないが、着実に自分のものになるのではないだろうか。常に強いハングリー精神を持ち続け、書と向き合う姿勢が大事だと思う。



第34回書道芸術院展出品

名越蒼竹書



書道芸術院前衛書展ホープ作家出品

工藤永翠書



西川藤象
(千葉)

「杜口風塵外安心筆墨間」

心をおちつかせ、書と真剣に向き合う時間を大切にしたいと常々考えています。師、半田藤扇先生の情熱ある書を目標に、深みと響きのある線を探めながら、古典の臨書で線を鍛え、新しい作品創りに挑戦することに精進したいと思えます。

(藤象)



一條紅蕭
(宮城)

「天地創造」

天空の清らかさと地の逞しさが表現できる様に墨の濃淡や線の動き、飛沫などを織りまぜてみました。この作に私の想いが伝わってれば幸いです。心の表現を主とする世界なので、これからも豊かな心を養っていきける様に努力してゆきたいと願っています。

(紅蕭)



坂口とし子
(千葉)

「天高し雲ゆくかたに
我もゆく」 (虚子)

明るくのびやかで、情趣に富んだ心の風景とでもいえる句。この平明な句は、やはりわかり易く表現したいと思えました。変体がなをなるべく少なくと心がけましたが単調になってしまい、わかり易く書く事の難しさを感じております。歌や句が立ち上ってくるような師の線に常に憧れております。

(とし子)



伊藤稜雲
(群馬)

「雲山千里」

雲の山、千里も遠い。夏の青空にゆったりと白い雲。長い間ご指導くださった西林先生、そして社中の仲間の皆様に感謝の気持ちでいっぱい입니다。これからも初心にもどり歩み続けたいと思えます。

(稜雲)



益子翠蘭
(千葉)



「信而好古」

白扇書道会に入会約20年、扇筆会カリキュラムによる古典学習を基礎に文字の歴史を学んでいます。「伝達」としての文字から「芸術」の世界へ。活字では表現出来ない血の通った現代に生きる文字表現を目指して。「信而好古」先人の教えに学ぶ。今、挑戦の漢帛書で表現してみました。

(翠蘭)



丸山筑峰
(長野)

「春風」

書芸術への一步を踏み出したばかりの私、万物が躍動し始める春に気持ちを重ね併せ「春風」と刻してみました。「創造欲、製作欲、発表欲」の三欲が大事だよ。宮澤梅径先生の教えを噛みしめ書・刻・彩のバランスを大切に刻字作品創りに更なる努力精進致す所存です。

(筑峰)



米倉聲香
(宮城)



「落陽」

書を始めて50年余り、心から書の深さと、苦しみ、喜びを感じるようになったのは、千葉蒼玄先生のもと、前衛書に出会ってからです。私がテーマとしているのは、「音」です。白い平面から音が感じられたらと、日々戦っています。

(聲香)



大野輝風
(福岡)

「月光」

「ある美しい風景に我を忘れて、どこまでもどこまでも追いかけて歩きすぎたような感じですね。あとをふりかえって見たら私の家は見えなくなっていました。」(細密画家・熊田千佳慕(くまだちかほ) 母校の小学校のピアノに「月光の夏」を重ねつつ。

(輝風)

特集：書道芸術院秋季展

書道芸術院秋季展

審査会員選抜作品
審査会員候補公募作品

会期 平成22年10月5日(火)～10月10日(日)
会場 東京セントラル美術館

秋季展実行委員長

後藤 大峰

恒例の秋季展、今回も銀座セントラル美術館にて10月5日から10日まで開催されました。

今回展も昨年同様、書道芸術院の役員と審査会員選抜、峰雲賞受賞者の各先生方の作品に加え、三年前から実施している審査会員候補の皆さんから作品を募り、選考の結果入選、入賞されたみなさんの作品が展示されました。

例年同様に10月5日には研究会が表彰授与式の後、行われました。実行委員長の進行により、各、秋季菊花賞受賞者の制作意図や作品に対する思いが述べられました。

その後選考委員の各先生方から次の様な助言がありました。

恩地春洋先生―他展を引用され、心に訴える作品をそれぞれに表出している点に注視した。

大野祥雲先生―作者の意思、意図の

ハッキリとした作品が入賞、入選している。下谷洋子先生―良い作品は、一目で光るものがあり、線質、余白とかが関わってくる。辻元大雲先生―

現代詩文書は詩文の内容を大切に、詩文に合わない表現はやらない方が適切。金井如水先生―書線の表出の方法、余白の取り方と雅印の位置との兼ね合い。宮沢梅径先生―刻字、篆刻

作品の応募が少ないので来年以降の多くの出品を期待。等の助言がありました。最後に辻元大雲先生から、全体の総括を述べていただき終了しました。

その後、御来賓をお招きし、恒例のレセプションを行い、初日の日程を終了致しました。

書道芸術院秋季展〈審査会員候補公募状況〉

部	出品点数	出品人数	秋季菊花賞	入選	落選
漢字	123	82	5	18	59
かな	11	9	1	3	5
現代詩文書	72	43	2	9	32
前衛	73	43	2	9	32
篆刻・刻字	1	1		1	
	280	178	10	40	128

会場入口

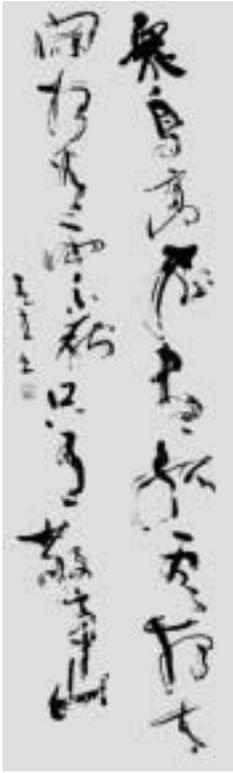


恩地春洋会長あいさつ
(祝賀会)



辻元大雲理事長あいさつ
(表彰式)

〈独坐敬亭山〉



常任総務 高田 春来

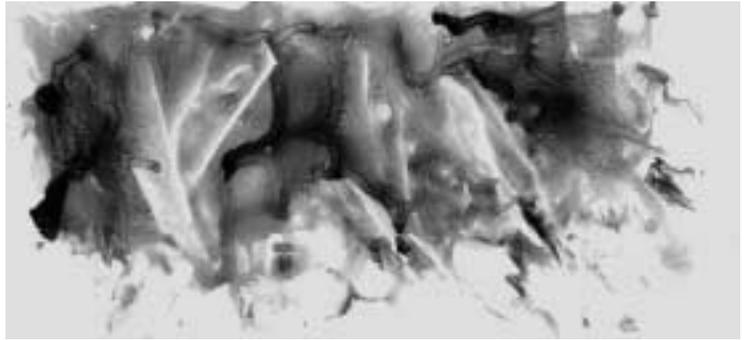
165×53cm

〈鐘〉



常任総務 飯沼 恵鳳 60×180cm

〈瞬〉



常任総務 平岡 千香子 70×146cm

〈秋〉



常任総務 山藤 美知子

170×60cm

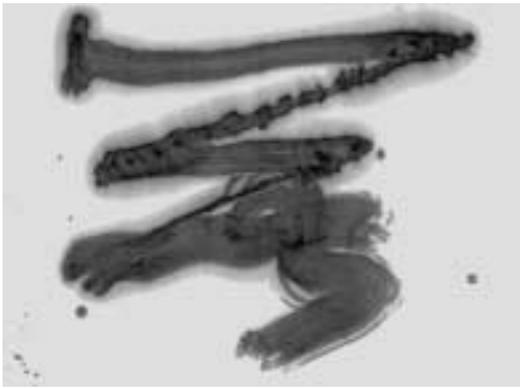
〈かぜのたより〉



常任総務 尾形 澄神

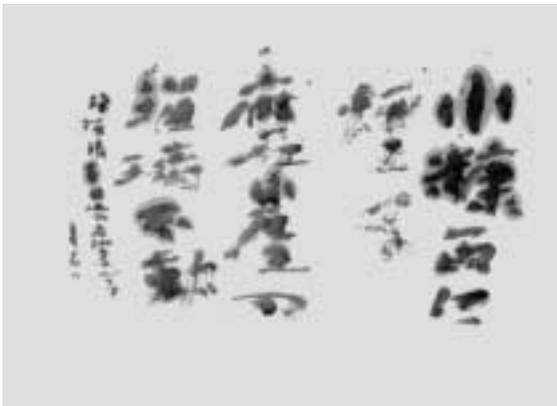
137×70cm

〈無〉



常任総務 水田 春峰 90×120cm

〈磨崖仏〉



常任総務 畑中 弄石 88×118cm

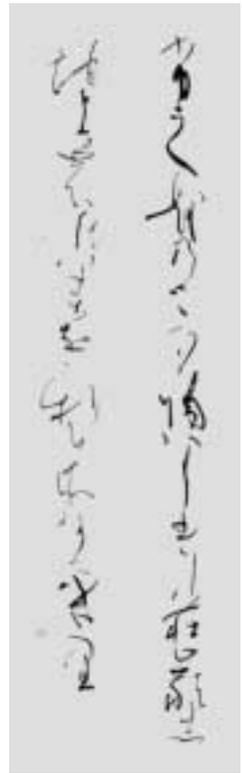
〈面〉



常任総務 東 素子

92×60cm

〈薫染〉



常任総務 田村 澄子

172×53cm

〈盪變〉



常任総務 半田 藤扇

175×53cm

〈黒髪〉



180×54cm

常任総務 大辻多希子

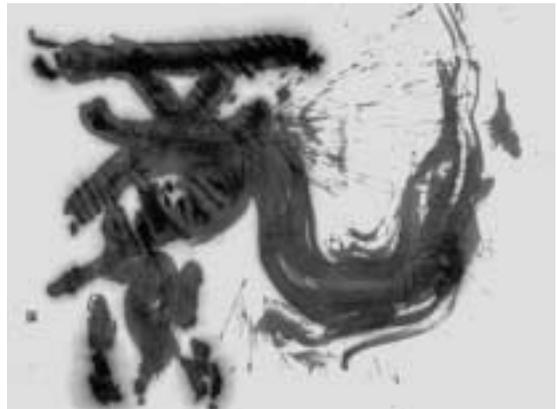
〈秋興〉



170×53cm

常任総務 小島小汀

〈瀧〉



総務 川島舟錦 90×120cm

〈SIN〉



常任総務 太田蓮紅 90×120cm

〈鷹〉



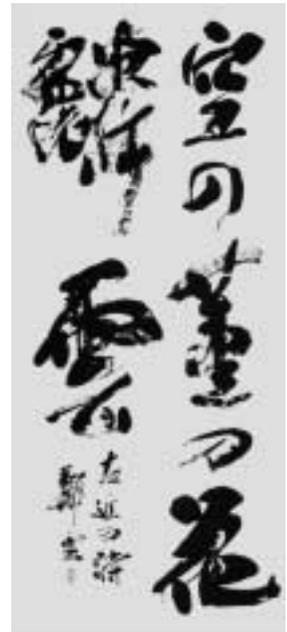
常任総務 白石和楓 67×146cm

〈破〉



常任総務 前田龍雲 90×120cm

〈宗左近の詩〉



常任総務 田村鄭雲

142×64cm

〈地球追放〉



常任総務 出原悦柳 60×180cm

〈山風が〉



総務 鈴木せつ子

170×54cm

〈波動〉



総務 大石利一 72×151cm

〈送魏萬之京〉



総務 佐藤菜扇

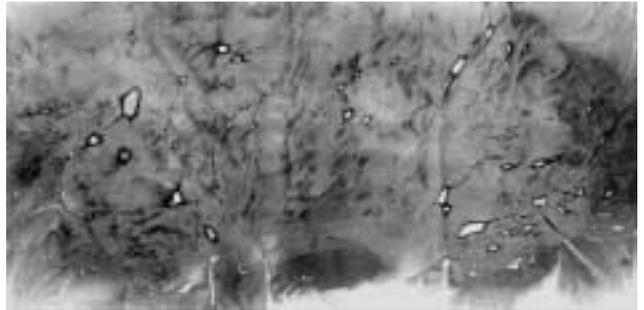
169×24cm×2

〈渡谷道〉



総務 青木雪華 90×120cm

〈大地〉



総務 柳町祥香 70×137cm

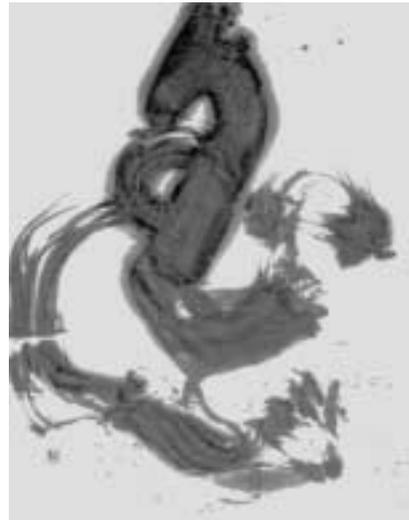
〈2010夏〉



総務 中野黎峰

175×55cm

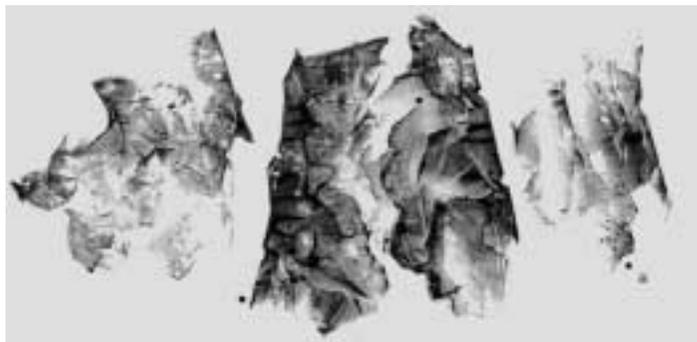
〈蓬〉



総務 青柳明華

121×90cm

〈真現〉



総務 石田和子 73×152cm

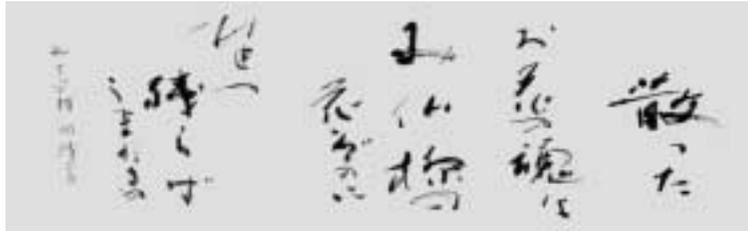
〈兵馬備〉



総務 井上始源

178×53cm

〈花のたましい〉



総務 小竹明峰 55×175cm

〈吉語〉



総務 赤羽蘭径

90×49cm

〈梅内美華子の歌〉



総務 田中扇溪 90×119cm

秋季菊花賞

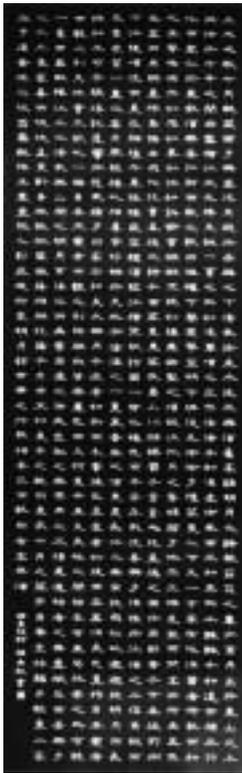
審査会員候補



〈和璧〉

小竹正高

180×60cm



〈蘇東坡詩〉

橘由紀

175×55cm



〈射〉

三谷信子

121×91cm



〈土佐の海〉

山田翠香 60×180cm



〈後赤壁賦二種〉

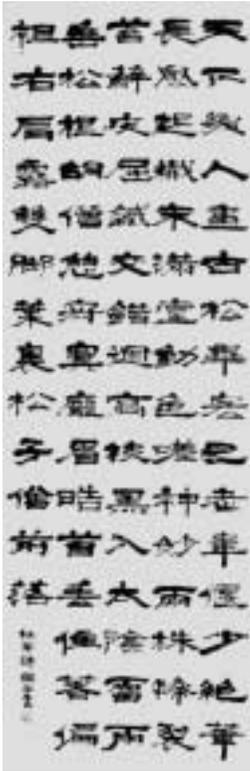
竹浪叙舟

175×55cm

秋季菊花賞

審査会員候補

〈杜甫詩〉



東平絹子

175×57cm

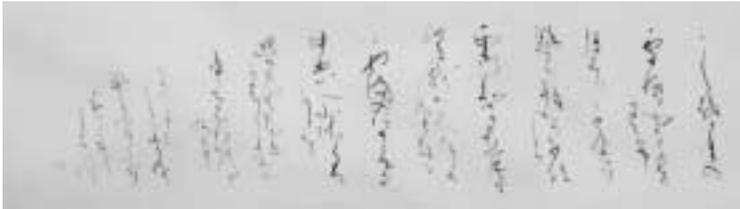
〈珠〉



相内珠莉

182×61cm

〈しろがねの〉



九條純代 52×181cm

〈絆〉



亀井紫風 73×152cm

〈佐藤節子の句〉



天野白扇

178×58cm

用紙 半紙普通判
左の法帖の中から何文字臨書してもよい。(掲載部分以外は不可)

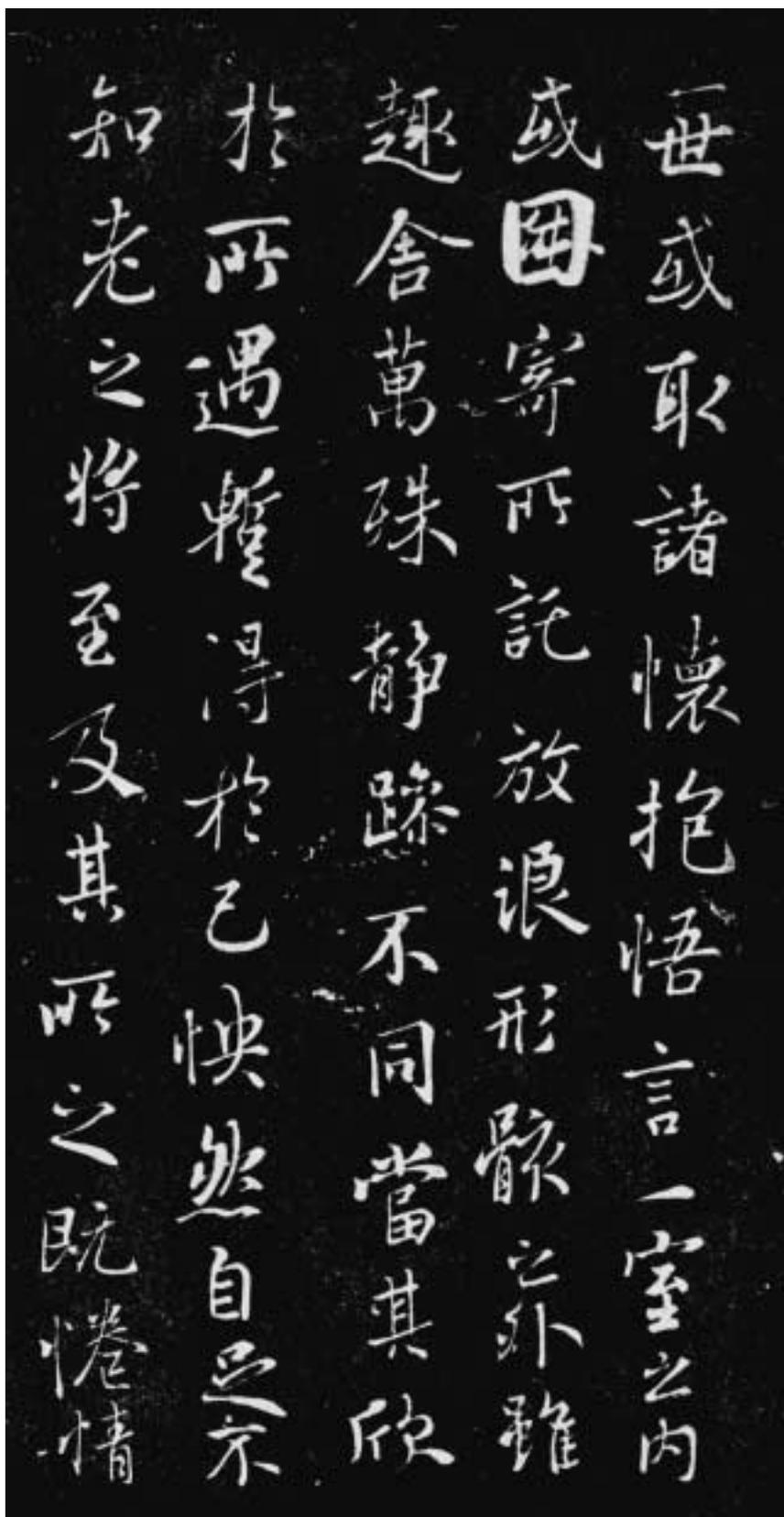
特別研究部臨書課題

Ⅱ (全紙以内・縦横自由) 左記の掲載以外も可

〔解説〕 蘭亭叙は、自然な流れの中に筆勢が強く力がこもっており、用筆は精密で熟練し、千変万化である。
字数は、28行324字で、同じ字はみな別の形に作り、最も多い「之」の字などは、20字以上もあるが、ことごとく変化して同じものがない。そのとき神の助けがあったのか、後に幾度書き直してもそれ以上のものはいできなかったという。そこで羲之自身もこれを愛重し、子孫に伝えて七代の孫智永に至った。
(編集部)

一世。或取諸懷抱。悟言一室之内。
或因寄所託。放浪形骸之外。雖
趣舍萬殊。靜躁不同。當其欣
於所遇。暫得於己。快然自足。不
知老之將至。及其所之既倦。情

※落款を必ず入れる
署名、もしくは
○○臨
(押印のみ可)



(86%縮小)

特別研究部臨書課題

Ⅱ（全紙以内・縦横自由）左記の掲載以外も可

用紙 半紙普通判（料紙可）

〈よみ〉

おいぬればさらぬわか

れもありてへばいよく

みまくほしき

みかな

かへし なりひら

よのなかにさらぬわか

れのなくもがなちと

せといはふひとのこ

のため

Ⅱ注Ⅱ かな研究部競書作品は、

上の古筆の掲載部分より
歌一首以上を書く。

（全臨も可）

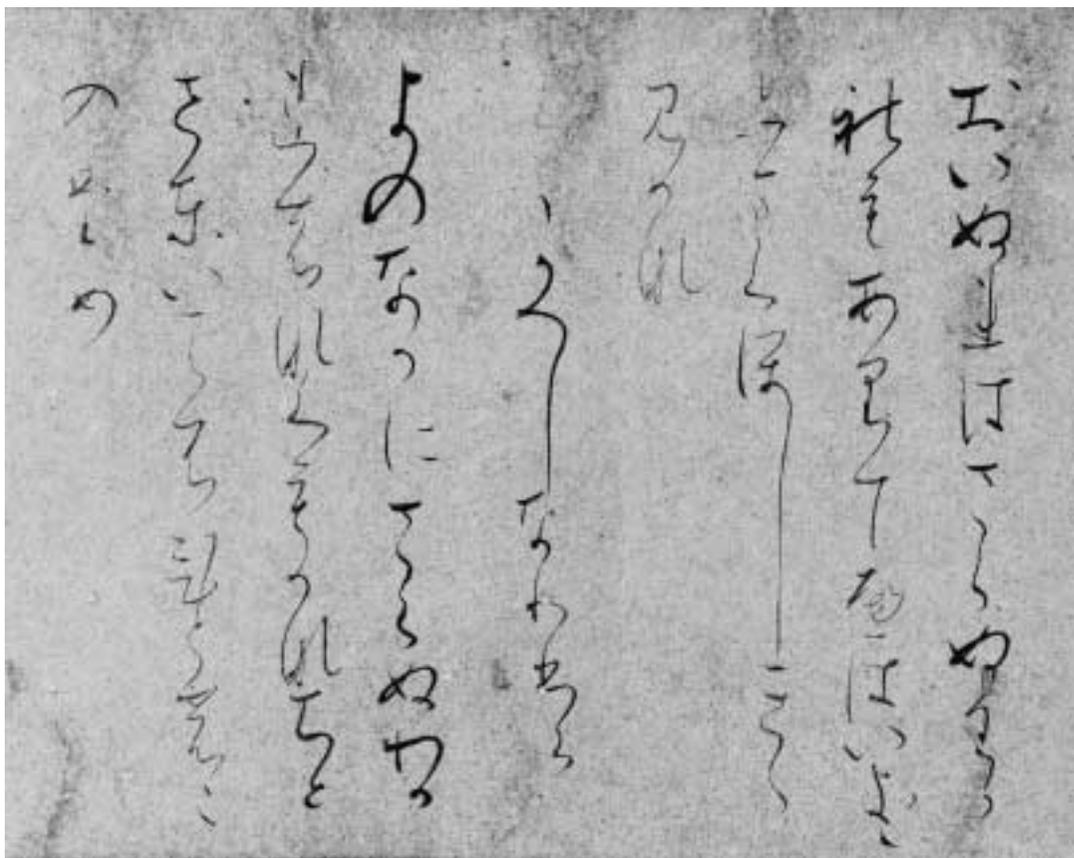
※落款を必ず入れる。署名、
もしくは〇〇臨
（押印のみも可）

〈解説〉

曼殊院本古今集の一つの見どころは、線質にある。繊細にして鋭利、そして清く澄みきった筆線が、自由自在に空を飛び交うようなリズムを感じさせる。それでいてその書には力みがなく自然体であり、しかも気品に富む。

筆者を藤原行成と伝えるが、その自筆と比べて異なる。行成よりさらに下って11世紀後半ごろの筆と考察される。

曼殊院本は、平安朝古筆の中でも最小の巻物であり、その書の芸術性から見ても、書道史上に銘記すべき遺品といえよう。



(81%縮小)

漢字規定 初段以上【十二月十日締めきり】 用紙 半紙普通判

最首翠風選書



鳥啼山更幽 よみ(鳥啼きて山、更に幽なり)

書体||自由

習い方解説 (二)

最首翠風

鳥啼山更幽

(鳥が啼いて秋の山は更に幽玄になる。)

読書の秋。学書の秋です。

今月は、書体を変えて書いてみる”をテーマにしました。初段以上の上級課程になると「書体自由」となります。この特権(?)を生かして楽しみましょう。余裕のある方は五体全てに挑戦してほしいもの。参考手本はオーソドックスな行草体と楷書(楮法)をとり上げました。草書体は必ず字典で確認してください。



漢字規定 秀級以下 【十二月十日締めきり】 用紙 半紙普通判

小林琴水選書



雲高 気静 よみ(雲高く気静かなり)

書体Ⅱ楷書

習い方解説 (二)

小林 琴水

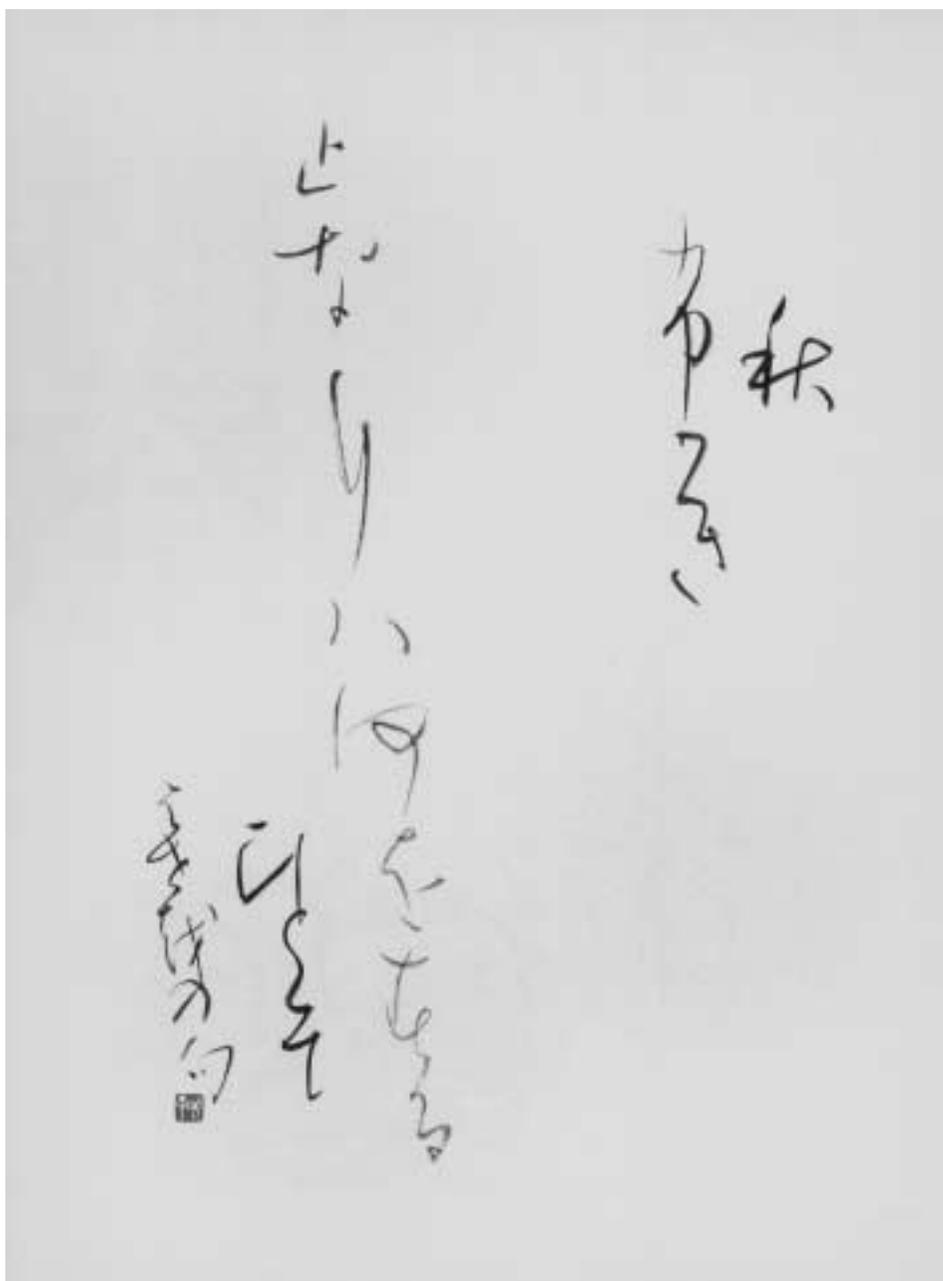
雲高気静

(雲は澄み渡って高く気も澄んで静か)

長鋒を使用しました。ゆっくりと運筆することによって固さが、ふせげます。速度を早めると、どうしても固くなりがちなので注意してほしいと思います。速度は、非常に大切です。強さ、線の味、など又線の深さなども研究して下さい。品格の高い楷書になるよう、努力して下さい。

かな規定 初段以上 【十二月十日締めきり】 用紙 半紙普通判（料紙可）

石井明子選書



よみ方 秋ふ(布)か(可)きとなりは(八)何をす(巻)るひとぞ

ば(者)せ(世)を(越)の句

創作

習い方解説 (二)

石井明子

秋深き隣は何をする人ぞ

(松尾芭蕉)

同じ大きさの紙面にながで表現をする場合、短歌より俳句の方が難しいと、私は感じています。字数が少ないから簡単だと考える人がいますが、「字数が少ないから難しい」と気付いて下さい。その上で、かな作品の決まりごとの中で、許容される自由な表現を考えていきたいものです。

古典か現代の俳句かでも自ずと書き方は違ってきます。内容に相応しく、十七字の羅列というだけに終らない雰囲気ある作品創りを目指しましょう。

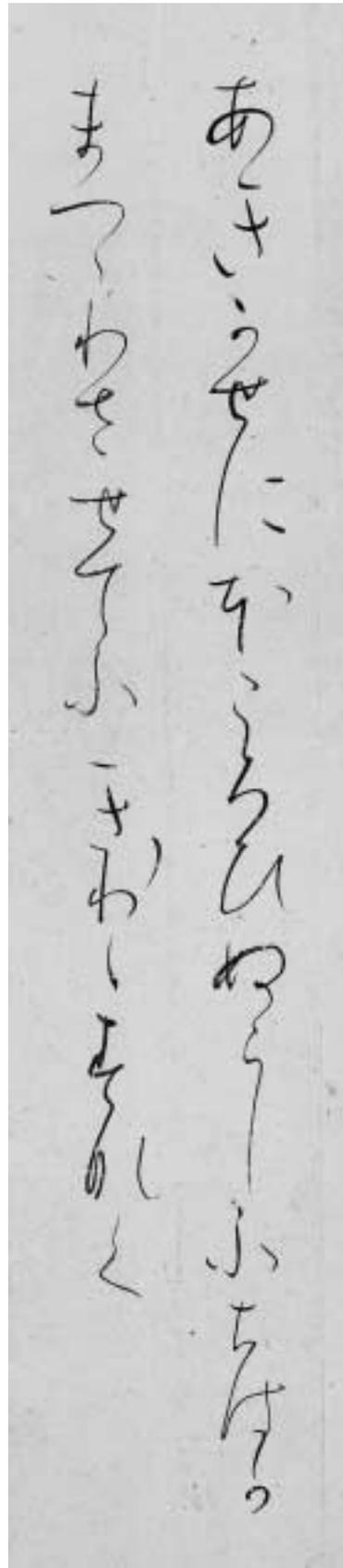
俳句という文学を思うと、かなで表わすものは難解な表現にならない方を私は好みます。読み易さも大切にしたいことの一つです。

さあ、芭蕉の寂寥感を思っ、筆をとりましょう。

かな規定 秀級以下 【十二月十日締めきり】 用紙 半紙タテ1/2 (料紙可) (たて32センチ・よこ12センチ)

掲載写真のうたを全臨、または部分(二字以上の連綿)を臨書する。

高野切第三種
(掲載写真縮小93%)



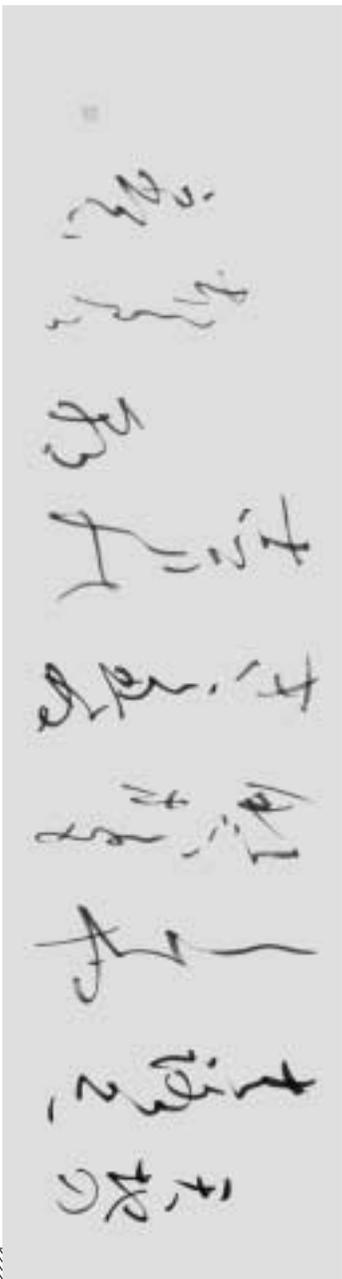
よみ方 あきか(可)ぜには(本)ころびぬらしふぢばか(可)
まつどり(利)させてふきり(利)くす(巻)な(那)く(久)

習い方解説 (二)

和氣しげ代

かな条幅規定 【十二月十日締めきり】 用紙 小画仙紙半切(料紙可)

和氣しげ代 選書



よみ方 天地のは(者)ろ(路)か(可)に(二)してやな(那)み(三)お(於)とも
きこえ(盈)ぬし(志)ま(万)の(能)朝ぼ(本)らけ(介)か(可)も(裳)

天地のはろかにしてや波音も
きこえぬ島の朝ぼらけかも
(清水比庵)

近代短歌です。横作品は一行に収まる字数が少ないので、字形は横への動きを大きく。雄大な歌意を思い、行間はほぼ一定にして、後半三行は高低をつけ趣きをかえて収めました。穏やかに運筆。リズムが大切です。

※よこ形式に限る

創作

出品券

貼付位置

漢字条幅規定 初段以上 【十二月十日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

西林乘宣選書



是日也天朗氣清惠風和暢仰觀宇宙之大
(是の日や天朗らかに気清み恵風和暢す仰いで宇宙の大を觀)

書体||自由

漢字条幅規定 秀級以下 【十二月十日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

辻元大雲選書



鶴聲秋更高 (鶴聲秋更に高し)

書体||自由

習い方解説 (二)

西林 乘 宣

これまでは、題材というところ「墨場必携」の中から春夏秋冬の順に選んでいきましたが、それでは平凡なので趣をかえ、六点とも著名な古典の文言を別の書体で書いてみました。今回は王羲之「蘭亭序」の中の一節です。こういうのは初めてご覧になるでしょう。なお、口はばつた言い方ですが、小生この蘭亭序を全文暗記し、時々口ずさみます。

習い方解説 (二)

辻元 大 雲

今回も五字句一行書です。のびやかな行書表現を試みました。条幅一行書はかなり大き目の筆を使用しないと余裕ある表現が出来ません。太細の変化潤濁のバランスなどは使う筆により大きく影響されます。

「聲」は旧字体です。常用漢字体の「声」でも構いませんが、旧字体や書写体を使用する場合があります。

「山粧う」は日卧遊録に「秋山
明浄にして粧ふが如し」とあるのに
もとづく。類語に「粧う山」「山彩
る」などある。

谷底の朴より山の粧ふらし
爽雨句 泰濤かく

用紙Ⅱはがきの大きさ、白色のもの、黒インク使用のこと

書体Ⅱ自由

習い方解説 (二)

牧 泰濤

今月は「かぎ」のある文章にしました。引用や強調の時は一重かぎ「」。

書名は二重かぎが一応のきまり。二重かぎの筆順？ 正式か否かは不知。私的には凸凹（どちらも五画の常用漢字）の筆順に習って乙字を基本に書いています。「||」、「乙。」||乙、「|」です。ご参考に。

〔ペン字考その二〕どんなペンお使いですか。私は、国内メーカーの500円のもので先月と今月書きました。私は「紙を切る」感じが好きです。筆（ペン？）融というか、引っ搔く、刻しているタッチの方が「文字の練習に向いている」と信じているからです。点画の払いやきれいな線の表現は、筆線を追求して苦心工夫した国産のペン先が一番？ 値の高さ、軸のデザインで、いい字が書けるわけでもないし…。私の日常使用のペンは太線です。

※落款を入れ忘れないようにしてください。（落款は自分の名前を入れてください。）

ホープ作品 各部総評

NO. 593

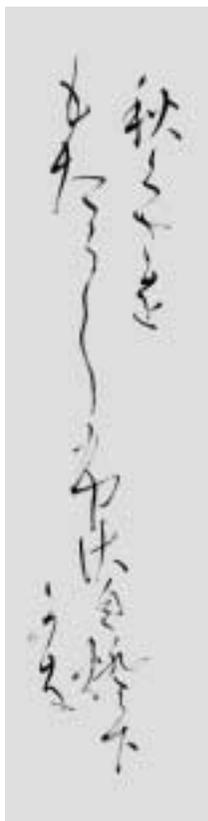
ペン字部 師範 永瀬 蓉汀

暢やかな運筆に骨格の確かさが
加味され、布置も美しく落款まで
気脈が通じた格調高い見事な作品。
◎ペン字部総評 漢字が多いため
かかなとの調和は全般的に良かつ
た。落款の入れ方に工夫作が多く
今後が楽しみです。(和楓評)

朱雀門・東院庭園に続き
大極殿の復原もなり三〇〇年
前の王都の姿を偲はせる
平城宮跡、いとも特集より落書き

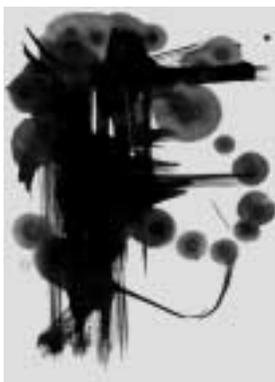
かな条幅部 準師 知野久美子

正確、素直、中庸と模範的学習
態度を感じさせ、控え目ながら見
飽きぬ魅力を湛えた秀作です。
◎かな条幅部総評 全体に具の誤
字が多く残念。字典で一字ずつ確
かめて制作のこと。墨量は控えめ
が品よく仕上がります。(明子評)



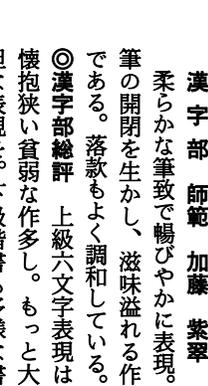
前衛書部 特選 野村 成子

単純な直線と点・墨色の变化・
構成による余白の生かし方で奥行
きが出た魅力的な作品である。
◎前衛書部総評 表現が多様化し
たが、落款印の大きさや位置等考
慮すべき点も多い。(蓮紅評)



漢字条幅部 師範 森下 祥泉

鍾繇を学んで静かな深い線質の
作品に仕上げた。難しい楷書を終
始一貫持続させた精神性高い佳品。

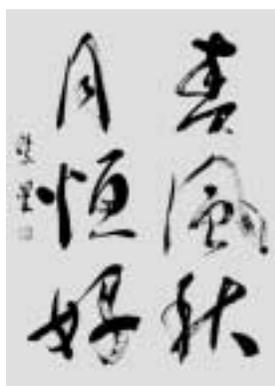


現代詩文書部 特選 亀井 勲

飄逸な筆運びが魅力的。紙面構
成も新鮮で墨の入れ方も要を得て
楽しい作品となっている。
◎現代詩文書部総評 何種類か書
いた後一点に絞って出品してほし
い。軽いものが多い。(石雲評)

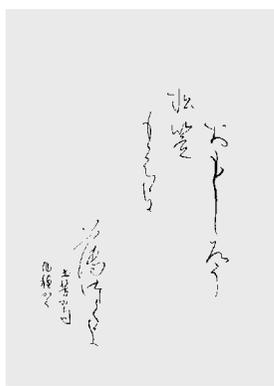
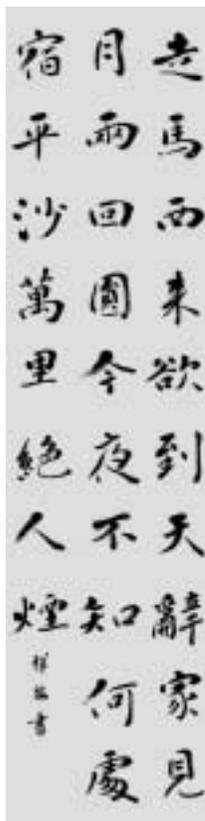


◎漢字条幅部総評 七言絶句の多
字に苦心作も見られ勉強の足跡が
覗かれた。草書体は必ず確認し
たい。(翠風評)



かな部 師範 加瀬 作穂

伸びやかに墨色も美しく、小筆
をこの様に大胆に確実に操れるこ
とに感服。印が欲しかったですね。
◎かな部総評 概ね佳い作が多かつ
たが、字組みを換えた場合の構成
の方法に、字数の少ない俳句の難
しさを感じました。(洋子評)



特別研究部優秀作品(特選)

漢字 (惠雅) 板橋雅邦

「百狐向月」



板橋雅邦書

180×60cm

かな (卯月) 新谷嵐泉

「白秋のうた」



新谷嵐泉書

162×53cm

- ◆余白の美しいバランスのよい作で安心して拝見できる。二行めの墨量に変化が加わると更に可です。(明子評)
- ◆すっきりと空間におさまりやわらかい線を見せて可。欲を言えば初めの書き出しが少し固かったか。(蒼玄評)
- ◆流麗な線で、温雅な世界を作り上げている。構成、潤濁等の変化が自然で心穏やかに鑑賞出来る。(萬城評)
- ◆流れよく爽快な気分の作。やや運筆が早すぎるのか、くい込み不足の感あり。厳しい線の鍛錬を。(大雲評)

- ◆二双紙の特質を生かし、濃墨をたたきつける如き強い運筆のリズムが小気味よい作。次回を期待する。(大雲評)
- ◆濃墨でぐいぐいと押しこめる線は重厚。草書の造形に難もあるがそれを超えての意欲は群をぬいて可。(蒼玄評)

- ◆巧みな動きが、濃墨の醸し出す力と相まって見る者に迫ってくる。紙面中央の余白でバランスが見事。(明子評)
- ◆躍動感に溢れる筆の動きが、切れ味のよい線を生み、爽快感がある。濃墨の濁線が効果的で魅せる。(萬城評)

臨書 (大雲) 江本興舟 「宣示表」



江本興舟臨

138×70cm

- ◆長鋒による臨書でふくらみよりも清々とした明るさを感じさせる。筆端まで神経の行き届いた秀作。(蒼玄評)
- ◆特徴の取りづらい古典を、柔毫濃墨による線質の変化で表現する。滋味ある臨書で好感を持つ。(大雲評)

- ◆宣示表の特徴を捉えた上で、線質に独自の表情を加えている。その表情が非凡な臨書作品に仕上げた。(萬城評)
- ◆日頃の丁寧な臨書に、個性ある味わいを加味された力量は立派です。渴筆が詩情を感じさせます。(明子評)

漢字 (千葉)
大越墨扇

「李白詩」



大越墨扇書

138×70cm

◆地道な校字、着実な臨書、一つの作品が生まれるには基盤が必要。じっくりと取り組んでください。(萬城評)

◆一字ずつに込められた思いを感じ、書くことがどれ程好きかが伝わってきます。総ては思いからです。(明子評)

◆五言律詩を帛書体で安定感よく表現。研鑽を積んでいる技術の高さが現れる。更に動きある表現を。(大雲評)

◆独特の造形で詩情を感じさせる。抜筆に弱さを感じるが、紙を変えればもっと深くなるのでは。(蒼玄評)

前衛書

(蓮紅) 大友紅蓉



大友紅蓉書

180×60cm

◆白と黒との対照が鮮明で、明快な作。強い筆致の潤筆部からスピーディな渴筆への展開が印象的な作。(大雲評)

◆今年の猛暑の後の涼風ですね。熱い思いを力一杯表現しながらのこの無駄のない動きは美しい。(明子評)

◆切れのよい線で空間を切り白さを鮮やかに見せている。重い線もほしい気もするが筆が小さいせい。(蒼玄評)

◆制作時の緊張感が伝わってくる。線が厳しく冴えている。余白も効果的。落款印の風格が不調和か？(萬城評)

現代詩文書

(翠柳) 佐々木珪翠



佐々木珪翠書

180×60cm

◆二つの行間の変化、行の揺らぎが絶妙です。周到でありながら、無理がないのが爽やかです。(明子評)

◆墨の置き方が的を射ている。文字の大小もリズムもあり自然な流れとなっているが渴筆の変化もほしい。(蒼玄評)

◆柔らかな筆致で曲線を多用し、大小、細太、潤渴の変化に富み、見所の多い作。余白のバランスも良い。(萬城評)

◆リズムミカルな運筆が潤渴大小の変化を伴って動きある作。渴筆部やや上すべり感あり。更に工夫を。(大雲評)

創作	漢字	前衛	現代	篆刻	臨書	漢字	かな
80点	17点	18点	20点	1点	18点	17点	1点

〈特選候補者〉	大雲	長島	優雨	墨宜	小林	翠芳	舎人	高橋	小汀	かな	猪又	理扇	書泉	田子	白嶺	大雲	神谷	雲卿	現代	うる	桐谷	優華	陽陽	岩崎	陽光	樹原	庄司	咏舛	篆刻	中山	無硯	前衛	四谷	木原	尚子	青蓮	大町	菜円	蓮紅	一條	紅蕭	漢字	千葉	村田	笑華	英峰	佐藤	桂香	大拙	近野	響神	龍泉	小林	洋龍
---------	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

漢字研究部
(宣示表)

選評 小浜 大明

今月のホープ作品



久保 龍 玄

漢字研究部 特選 久保 龍玄
 明るく伸びやかな臨書です。宣示表のゆたかりとして温かい線がよく表現されています。また、伸びある穏やかな線の中に芯の強さも感じられます。これらは、正しい用筆を身につけている結果だと考えます。

◎漢字研究部総評
 よい作品が多数寄せられたことを嬉しく思います。残念なことに、もう一步踏み込んで

筆意や結体を正しく理解した上で臨書したなら、もっと完成度の高い臨書になっただろうと思われる作品も少なからずありました。不明な点はよく研究してから書いてほしいと思います。特に「能」の傍の書き方が気になりました。

この古典の転折は丸味をおび、縦画は向勢ぎみに書かれています。背勢に書かれた作品も少なくありませんでした。

有増益
昔與文

権跡曲折得宜
神聖之慮非今
臣下所能有増
益昔與文

神聖之
慮非今

権跡曲折得宜神聖
之慮非今臣下所能有
増益昔與文若奉事
先帝事有教者

神聖之
慮非今

神聖
先帝事

幸代 清子 雅子 啓子 翠子 千恵美

非今臣
下所能

先帝事
有數者

権跡曲折得宜神聖
之慮非今臣下所能有
増益昔與文若奉事也
事先帝事有教者

若以在
所慮可

若以在
所慮可

権跡曲折得宜神聖之慮非
今臣下所能有増益昔與文若奉
事先帝事有教者

静風 和枝 静乃 直舟 蘭舟

今者事
勢尚當

権跡曲折得宜神聖
之慮非今臣下所能有
増益昔與文若奉
事先帝事有教者有
似於此粗表

権跡曲折得宜神聖
之慮非今臣下所能有
増益昔與文若奉
事先帝事有教者有
似於此粗表

奉事先
帝事有

神聖之慮非今
臣下所能有増
益昔與文若奉
事先帝事有教

粗表二
事以為

瑠泉 皓紗 莉見 友風 楊風

權跡曲
折得宜

権跡曲折得宜神聖
之慮非今臣下所能
有増益昔與文若奉
事先帝事有教者有
似於此粗表

若以在
所慮

権跡曲折得宜神聖
之慮非今臣下所能
有増益昔與文若奉
事先帝事有教者有
似於此粗表

若思省
若以在

非今臣
下所能

侑子 百流 麗治 完子 悦子 郁子

